

五強い意志をもって「克己と強い意志 A(4)」

渡辺カネ

「淋しいだの、退屈だのとい  
う暇はちつともありません  
でした。」

渡辺(旧姓 鈴木)カネは、  
一八五九年、江戸(現在の東  
京都)で、信州上田藩の家臣  
鈴木親長の長女として生ま  
れました。



〔帯広百年記念館所蔵〕

当時はまだ、「女子には学問はいらない」という風潮でし  
たが、父から、漢文、和文、書道、そろばん、論語、儒教な  
ど多くのことを教わりました。

一八七五年、カネが十六歳の時、思いがけなく勉学の機会  
を与えられ、共立女学校(現在の横浜共立学園)に入学する  
ことになりました。

父から様々なことを教わっていたカネでしたが、初めての  
英語には、苦勞しました。洋書を片手に地理の勉強、英語暗  
唱など昼夜を惜しまず取り組みました。最初は、カネも戸惑  
っていました。半年も経つと英会話ができるようになりま  
した。また、アメリカ人の先生が指導する寄宿舎の生活では、

西洋的な食事や日常生活のマナーなどを教わりました。

カネは、二十三歳のときに、共立女学校英学部を卒業し、  
母校に留まり、助教師となりました。

文明開化が強く叫ばれている時に、高い教養を身に付けた  
同校の出身者は、外交官などの妻になる者が多かったのです  
が、北海道開拓に関心をもって父の影響を受け、カネは、  
開拓者の妻の道を選ぶことになりました。

「我が家は、武士では無くなったのだから、新しい土地の北  
海道に渡り、農業を始めたい。未開の土地を開拓して農業を  
行うことで、生活することもできる。私と銃太郎は、北海道  
開拓に行くことにした。」

と父が決意を伝えました。

晩成社の事業に参加していた兄の銃太郎は、北海道へ渡る  
ことをすでに決意していました。

「お父さまの行くところならば、どんなところにも行きま  
す。」

とカネは答えました。

カネを北海道に連れて行くには、誰かと結婚した方がいい  
だろうと考えた父は、晩成社の一員である渡辺勝との結婚  
をカネに薦めました。

カネにこの話を持ち出すと、

「お父さまのおっしゃることに従います。」  
とカネははっきりと返事をしました。

一八八三年、カネは、渡辺勝と結婚けっこんしました。

北海道行きが迫せまったある夜、共立女学校のピアソン校長は、カネに、自身が四人の子や夫に先立たれたことや外国人と日本人の間に生まれた子が、親に見捨てられていることを知り、日本に渡る決意をしたことなどを話し、

「北海道の開拓も大変でしょう。あなたもできる限りのことをしなさい。」

と言って、カネに神の守りと導きがあるように、と祈いのちってくれました。カネは、外国から日本に骨を埋うめる覚悟かくごで己を無にして働はたらいているピアソン校長のことを思えば、自分が夫の待つ北海道に行くことなど問題にもならない小さいことだと悟さとりました。

一八八三年九月、カネは北海道に渡りました。帯広に着いたカネは、新しい土地に住み慣れる間もなく、開拓者の妻として、活動を始めました。それは自宅に晩成社の子どもやアイヌの子どもたちを集め、読み書きを教える塾はなを開くことでした。

塾はなといっても、\*石盤せきばんが一つあるだけで、教科書はなく、紙も十分にはありません。ひらがなの読み書きができない子

どももいるため、まずは「いろは歌」を教え、書かせました。カネはどの子にも、分けへだてなく読み書きを教えました。そのうち、聖書を教科書代わりにして、子どもたちに読ませたり、聞かせたりして教えました。

子どもたちが「少し飽あきてきたな」と思うと英語で勉強したロビンソン・クルーソーの物語などをやさしく話しました。カネの話に、子どもたちは、目を輝かがやかせて聞き入りました。

「この子たちのために私ができることを頑張ろう。」とカネは思うのでした。

しかし、無人の荒れ野あの開墾生活は、カネの想像を絶するものでした。常に食料が足りず、草小屋の冬は寒く、夏はおびただしい蚊かやブヨが発生しました。さらに冷害こうずいや洪水、野火などの災害が次々と襲おそいました。

「カネさんは、本気でこの土地にいるのかい。凶作続きじゃ生活もできない、もうご免だ。家族がいる郷里に帰りたい。」と毎日のように開拓者の妻や男たちがカネのもとに相談に



「渡辺勝 カネ入植の地の石碑」  
〔帯広市〕

やってきました。

「世の中には、まだまだ苦しい生活に耐<sup>た</sup>えている人が大勢います。私はここを動く気はまったくありませんよ。」

とカネは、笑って答えました。

「カネさんは、どうしてもこの土地にいるのか。カネさんが、いるなら私もこの土地の開拓を続けるか。」

と相談に来た開拓者の妻や男たちは、開拓を続けました。

一八九三年、カネが三十三歳の時、夫の勝は、然別村（現在の音更町）で、牛馬を飼い、牧場を開きました。カネは、帯広と然別村を行き来しながら、働き続け、新しい土地で再出発をすることになりました。

カネは、どんなときも開拓地を離れず、開拓者の妻に助けをもらいながら、六人の子どもを産み育てました。

然別村でカネの苦労はさらに続きます。しばらくは事業も順調で生活は安定したかのように見えたが、最終的には開拓した農地を手放す結果につながりました。

晩年、カネは長年住んだ然別村を離れ、帯広に戻り、十勝の開拓を始めた晩成社の生き残りとして\*気丈<sup>きじょう</sup>な気持ちをもち続けました。

カネは、開拓当時のことを教えてほしいと訪ねてきた人々に、分け隔<sup>へだ</sup>てなく、丁寧に質問に答え、開拓当時のことを語

り伝えました。

入植の頃の思い出を語ってほしいと学校などに招かれたときにカネは、

「晩成社は失敗しましたが、十勝がこんなに栄えるようになったのですから、本当に満足です。」

と必ず話すのでした。

「十勝野や 枯<sup>か</sup>れ株に咲く \*リリの花」

一九四五年、渡辺カネは、初めて入植した帯広の自宅で孫たちに看取られて八十六年の生涯<sup>しょうがい</sup>を閉じました。

そんな、開拓者の精神は、今も十勝野に息づいています。

\*石盤：薄い板状の岩に、木で枠をつけて、石筆で絵や字を

書くもの。児童などの筆記用に使われたもの

\*気丈：心がしつかりとしていること

\*リリの花：スズランの花



◎ 渡辺カネはどんな気持ちで、「私はここを動く気はありませんよ」と言ったのでしょうか。

◆ 今まで、「強い意志」をもって取り組んだ経験はありますか。